



鉄

湯

笑福亭 松鶴

三遊亭しん蔵書

昔から歌にもござりますが、大きい物で言はうなら、あれ九紋龍に釋迦ヶ嶽、奈良の大佛、仁王さんと申しますが随分大きな人間がありました。九紋龍と云ふ人は掌に錢が九文列んだと申します。釋迦ヶ嶽が御堂さんへ參詣して、お賽錢を上げると、御堂さんの屋根を越えて裏の座摩神社へ上がつたと聞いて居りますが、まさかそんな事は御座りすまいが、兎に角昔のお角力さんは大きかつたに違ひ御座りません。往來を歩いて居りますと、ナモシ前に長い棒が立ツてますが是れは何んだすコレハお角力さんの足ですがな、ヘエー顔が見えまへんなア、ソラ腰から上は霞が張つて見えまへんアノ中央に黒い物がありますあれは何んだす、アレハ膝頭の灸だんがな。ヘエーあすこ迄どの位おますやらう、大方三里程おますやらう、夫れから膝の灸をさんりと申します。最う一里上るとしりと申します。斯んな大きな人やから兩親も大きい。そんな譯でも無い。又母親の腹の中で膨脹して横腹

を蹴り破つて出たと云ふ譯でも御座りません。又身體が小さいよつてに遠慮して、裏門からコツソリと出んならんと云ふ事もムりまへん。茲にござりましたのは極く小さい男。着物の丈なら二尺を能う着ぬと云ふ小男で、職人さんでござりまして、仕事は至つて上物仕でおますが、嫁さんが至つての貞女者で、斯う云ふ畸形な夫に襟垢の付いた着物を着せたら、亭主を尻に敷いてると世間の人に、後指を指されるが厭やと云ふので、何時も小薩張りとした風俗をさしてござります。今日しも仕事が休みの事で、銘仙の着物に對の羽織、筑前博多の帯を貝の口に結び煙草入れを提げさして、何處なと遊びに行といふアれと、少許の小遣錢を持たして遊びに出しましたが、出て參りましたのが道頓堀、芝居の前。

「なア道頓堀は何時來ても宜いなア、此處まで來ると氣がスウとするで、芝居は何時も繁昌するなア、ア、え、藝題やなア、忠芝藏の通しや、何遍見ても飽かんア、大序から大詰まで女を一人も役さんと云ふ、能う出來てるなア、枝芝居でもやるが、大芝居は又別やで、役者が揃ふて居て、道具と云ひ衣裳と云ひ囃子鳴物に至るまで申しぶんが無いなア、エ、芝居やなア……斯んなならモツト唄に錢を貰ふて來たら良かつたのに……」

羨しさうに看板を見て居りましたが、それへ出て參りましたのが立派なお關取、昔は相撲取は芝居へ參りますと羽振りの利いた物で、相撲の櫓を芝居へ貸したと云ふ位で